

大塚・歳勝土遺跡公園開園20周年
三殿台考古館開館50周年企画展

横浜に 稲作が やっ てきた !?

文 高橋健

開催期間
9/16(土)
▼
11/12(日)

「見慣れた写真と見慣れた土器
だな…」

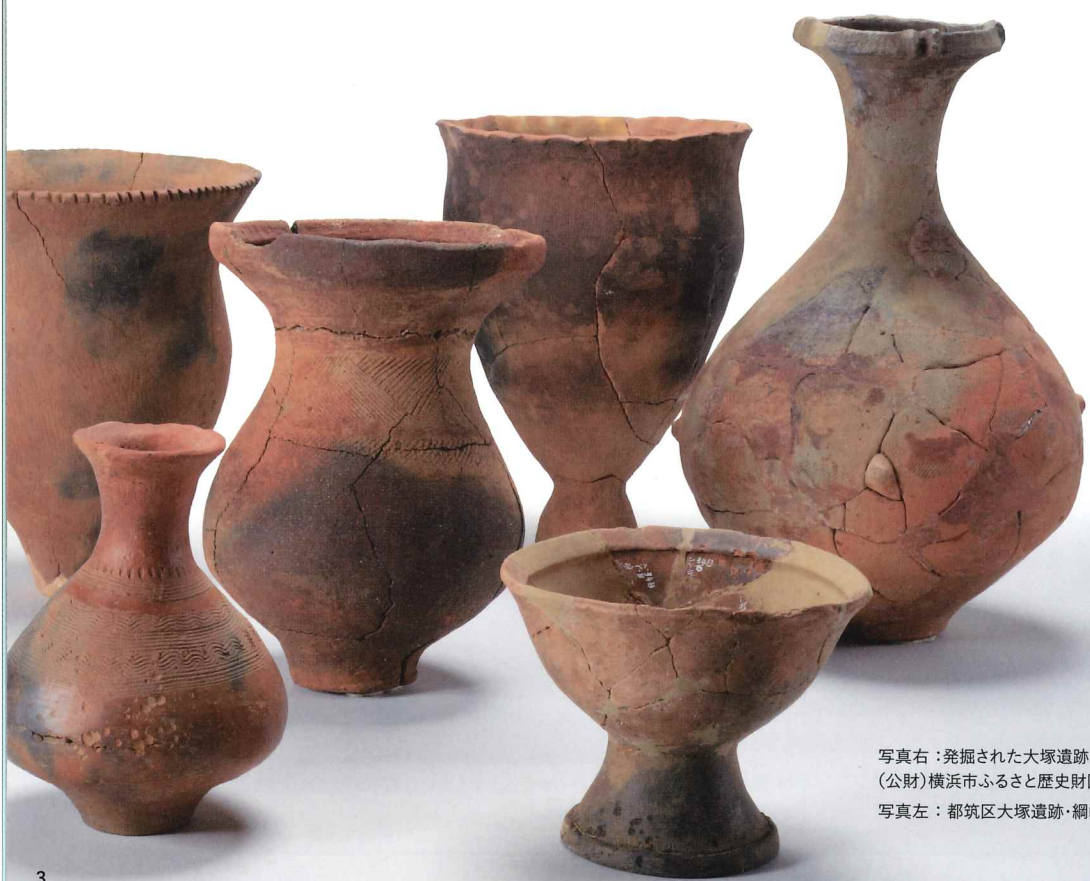
このページを開いてそう思わ
れたあなたは、当館の常連さん
でしょうか？あるいは考古学
の専門家かもしれませんね。

この秋、横浜市歴史博物館で
は、企画展『横浜に稲作がやっ
てきた!』を開催いたします。この
展示で取り上げるのは、横浜
市域で稲作が始まった時期である
弥生時代中期後葉です。宮ノ台
式土器が使われ、環濠集落が作
られたこの時代は、まさに大塚・
歳勝土遺跡の時代であり、遺跡
公園や常設展示室・原始Ⅱでお
なじみの時期にあたります。右
ページの大塚遺跡の空撮写真は
考古学関係の書籍などに掲載さ
れることも多く、いわば横浜の
考古学の「顔」と言ってもいいか
もしれません。

横浜市歴史博物館の特別展で
もこの時期は何度か取り上げら
れてきました。一九九六年の『弥
生のいくさと環濠集落』、二〇〇
一年の『甕の大環濠集落』では、
特に大塚遺跡を特徴づける環濠

集落というテーマに焦点が当て
られました。図録を開くと、九
州から東海地方まで各地の名だ
たる弥生遺跡の資料が集められ
た、力の入った展示だったこと
がわかります。二〇〇六年には
歳勝土遺跡の方形周溝墓に焦点
をあてた『弥生の人々が眠る場
所』も開催されました。その後は、
部分的にこの時期の資料を取り
上げることはあったものの、展
示全体のテーマとするのは、ほ
ぼ十年ぶりのこととなります。

このように久々となる宮ノ台
式期の展示ですが、今回は過去
の展示とは少し違った切り口に
する予定です。まず、全国の弥
生遺跡を取り上げるのではなく、
横浜・神奈川県内の資料を
中心に展示します。一九七〇～
八〇年代に発掘調査が行われた
港北ニュータウン地域の遺跡群
については、(公財)横浜市ふる
さと歴史財団埋蔵文化財セン
ターにおいて整理・報告作業が
進められてきました。この春に
は権田原遺跡の発掘調査報告書
が刊行され、弥生時代中期の主要



写真右：発掘された大塚遺跡
(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター提供
写真左：都筑区大塚遺跡・綱崎山遺跡出土の土器



高床建物の茅のふき替え



都筑民家園の茅ぶき屋根を修繕された茅吉さん



富士山のふもと、朝霧高原の茅場



束ねられた茅



講座のようす



茅刈り人の証しを身に付けて誇らしげな人々

おおつか さいかちどいせきこうえん
大塚・歳勝土遺跡公園だより

茅を刈る人

文 橋口 豊

大塚・歳勝土遺跡公園は平成8年3月23日に開園してから、20年が経過しました。この間に多くの見学者が、復元された環濠集落や方形周溝墓を目にし、およそ2000年前の弥生時代の人々の暮らしに思いをはせたことかと思えます。

大塚遺跡内の建物の屋根は茅を使って推定復元しています。茅とは、屋根をふく材料とする草の総称で、主にイネ科のススキ・チガヤやカヤツリグサ科のスゲなどの植物を指します。

茅は植物ですから、他の屋根材に比べて風雨にさらされれば劣化が進みます。定期的な修繕を行うことで内部を支える梁や柱を守ることができるため、大塚遺跡でも可能な限り茅のふき替えなどを行っています。

大塚遺跡の復元建物をより長く、より多くの人に見学してもらうためには、抜け落ちた茅のたたき込みといった日頃のメンテナンスやちょっとした修繕も必要です。そのためには何ができるのか検討していたところ、幸運にも都筑民家園の茅葺き屋根のふき替えに来ていた茅吉

さんとお会いすることができ、茅の確保と自主的な修繕についての講習会の存在を聞くことができました。そこで、当館では『かやぶき屋根プロジェクト(仮称)』を立ち上げ、屋根の材料となる茅と修繕を行える人材の継続的な確保を目指すことにしました。

プロジェクトの準備段階として、茅吉さんの手引きのもと、去る平成29年3月11・12日に当館職員3名が静岡県富士宮市の朝霧高原茅場にて茅刈り講習を受けました。この研修に参加し、検定に合格することで、朝霧高原茅場で茅を刈ることを認められた「茅刈り人」となることができるのです。

研修は、茅場での実地と座学の講座が行われ、その後の検定に合格した私たち3名は、晴れて「茅刈り人」となり、証となる赤色の帽子をもらうことができました。

当館ではプロジェクトとおして「茅刈り人」を増やしていくと共に、茅ぶき屋根修繕の講習と実地を重ねて、大塚遺跡の復元建物の活用を進めていきたいと考えています。

な環濠集落の整理・報告が一段落しました。言ってみれば、ようやく港北ニュータウンの資料をまとめて展示するための準備が整ったという訳です。さらに神奈川県西部の目を向けると、近年になって小田原市中里遺跡や大井町中屋敷遺跡などで発掘調査・報告が行われ、南関東地方における稲作開始期に関わる重要な知見が得られています。港北ニュータウン地域のすぐ近くでも、新羽浅間神社遺跡の発掘調査において、これまで知られていなかった弥生時代前期末、中期初めの遺跡が見つかりました。これらの新しい成果を取り入れながら、横浜地域で稲作が始まる前段階での人々の動きについても考えてみたいと思います。

いまいましたが、非常に小さいために検出例は限られていました。遺跡の土を洗って微細遺物を回収する土壌水洗選別法の普及によって、炭化種実の検出例が飛躍的に増えてきたのです。土器の表面に稲籾などの圧痕が残っている場合があることも古くから知られていましたが、シリコン樹脂でレプリカを作成して電子顕微鏡で観察する方法が発達したことで、肉眼では難しかった雑穀類の同定も可能となり、大きく研究が進展しました。どちらも小さくていささか「地味」な資料であることは否めませんが、これらの研究から導き出される成果には、非常に大きなものがあるのです。

三殿台考古館・資料整理ボランティア

三殿台考古館は、今年で1967年(昭和42年)の開館から50周年の節目の年を迎えます。

国史跡・三殿台遺跡の発掘調査は1961年(昭和36年)に行われ、台地上の縄文時代～古墳時代の集落遺跡を全面発掘して注目を集めました。出土遺物の整理作業は調査に参加したいいくつかの大学・機関で行われましたが、1966年に報告書が刊行された後は三殿台考古館において保管されています。ただし時間的な制約もあり、未整理のまま残された資料もたくさんありました。三殿台考古館では、資料整理ボランティアによって、これら過去の出土資料の整理作業を続けてきました。土器や石器などの洗浄・注記から接合・実測といった基礎的な整理作業を、埋蔵文化財センターのOBや考古資料課の職員から教わりながら、ボランティアの皆さんの手によって進めてきました。その成果は2009年に報告書としてまとめられ、『三殿台遺跡北側貝塚の調査』、2011年に発掘50年記念として実施された横浜市歴史博物館の特別展『大昔のムラを掘る』にも活かされましたが、その後もコツコツと作業は

続けられていたのです。その整理作業の成果の一部が、この秋に横浜市歴史博物館で開催される企画展『横浜に稲作がやってきた!?』において、活用される予定です。

この企画展は、三殿台考古館開館50周年と大塚・歳勝土遺跡開園20周年にあわせて、横浜市歴史博物館・埋蔵文化財センターと三施設合同で実施するものです。三殿台考古館では、同期間に記念ミニ展示『描いてみよう! 弥生土器の文様』を開催いたします。最近ごぶさたという方もまだ行ったことないという方も、この機会にぜひ三殿台考古館をご訪問いただければと思います。(高橋 健)



【横浜市三殿台考古館】〒225-0021 磯子区岡村4-11-22
TEL 045-761-4571

企画展「和船と海運」・展示余話

江戸時代の湊に古文書を訪ねて

文 吉崎 雅規

3月20日に終了した当館の「津々浦々 百千舟——江戸時代横浜の海運」展では、江戸時代の神奈川湊とつながりのあった各地の湊を訪れ、旧家に所蔵される貴重な古文書をお借りして展示をおこないました。展示をきっかけにした反響や成果をここで報告します。

北茨城市平潟町の廻船問屋・菊池家。ご子孫の菊池洋さんが所蔵する古文書には、神奈川湊との結びつきを示す記載のほか、東廻り海運に関する豊富な情報が含まれていました。この菊池家文書は今回の出展をきっかけに北茨城市教育委員会による再調査が予定されており、東廻り航路の拠点としての平潟の役割がより明らかになることが期待されます。

石巻からは神奈川湊に寄港した「御穀船」（仙

台藩の米の輸送船）に関する古文書をお借りしました。その古文書を所蔵する本間英一さんの蔵は東日本大震災で被災しますが、奇跡的に蔵と古文書が生き残りました。このエピソードを展示で紹介したところ、朝日新聞（3月13日付け）で紹介されるなど大きな反響がありました。

三浦市の須原庄一さんからは、神奈川湊の廻船問屋が浦賀奉行に提出した「誓約書」をお借りして、会期途中の2月25日から展示をおこないました。会期終了後に古文書の内容を詳しく読解したところ、浦賀奉行所の役割の一部を神奈川湊の廻船問屋が分担していたことを示す興味深い内容が含まれていました。この史料はそのままお借りして、テーマ展「ハマっ子、三浦半島をゆく」でも改めて紹介しました。

古文書を所蔵する皆さまからは、今回の出展にご理解をいただき、訪問時には温かいおもてなしもいただきました。紙面を借りて深くお礼を申し上げたいと思います。なお、北茨城市教育委員会の市毛美津子さん、神奈川県立公文書館の上田良知さんにも種々のご教示を得たことを付記しておきます。

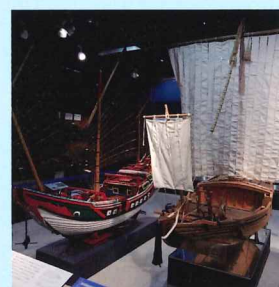
和船の構造と航海技術

文 昆政明

神奈川大学大学院
歴史民俗資料科学研究科特任教授

江戸時代の日本海運を支えた弁才船の実物は現在全く残っていません。神奈川大学会場では「順風満帆 千石船」と題し、和船の構造と航海技術を取り上げましたが、展示の中心となったのは、神奈川大学が所蔵する、静岡県焼津市にあった近藤和船研究所旧蔵の船模型と船大道具です。船模型は、長年和船研究を行ってきた近藤友一郎氏の製作によるもので、船図面や雛形をはじめとする船体研究の成果を盛り込んで制作されたもので復元模型とも言えるべきものです。

展示の中心は、上方の物資を江戸に運んだ菱垣廻船と中国福建省付近で使用された中国船の縮尺一〇の一模型でした。弁才船の主な特徴は、大きな一枚帆、複雑な構造の船尾と太い綱だけで固定された大きな舵、この舵は推進の浅いところでは取り外しが出来るようになっていました。そして幅広の船材で組み立てられた船体、波が船内に流れ込まないように防水を施した「水密甲板」が欠けている点です。これらの特徴は、弁才船が沿岸航路専用船で、風の強さや方向波の状態など、危険を避けて航海するのが前提であったことを示しています。こうした和船の特徴を際立たせるため、菱垣廻船と同種尺の中国船を並べて展示し、外観や構造の違いが理解できるように工夫しました。



神奈川大学会場の展示風景
左が中国船模型、右は菱垣廻船模型

和船の航海技術に関しては、現在神奈川大学が保管している、青森市にあった旧みちのく北方漁船博物館所蔵（現青森県野辺地町所蔵）の復元弁才船「みちのく丸」の帆走実験の成果をもとに、写真パネルを中心に紹介しました。「まざり」と呼ばれる、逆風帆走の貴重な写真や、操船方法の手がかりとなった船絵馬の解説に心が集まっていました。

神奈川大学会場の観覧者の動向をみると、先に横浜市歴史博物館会場を観覧してから神奈川大学会場を訪れる方が多かったように思われます。横浜市歴史博物館会場の展示においても、船体構造や航海技術について必要十分な展示がなされていましたが、より深く知りたいとの要望に対応できるよう、やや専門的内容も組み込んで構成しました。共催展における大学博物館のあり方を考える上で、大変有益な企画展であったと思います。

Mini- Exhibition

「津々浦々 百千舟」展 開催記念
常設展示室 ミニ展示
「浮世絵・絵図で旅する横浜の海辺」

前期：神奈川宿特集【2月18日（土）～3月14日（火）】
後期：金沢八景【3月15日（水）～4月2日（日）】

本展では、企画展本体のテーマだった海運・水運とはひと味違った横浜の海辺の魅力に注目しました。前期は神奈川、後期は金沢を取りあげ、狹師町、海産物の宝庫、風光明媚な観光地などの側面を、当館初出陳資料も交えて紹介しました。こうしたスピンオフ展示は初めての試みでしたが、企画展のイメージを、より膨らませていただけたのではないのでしょうか。今後開催される企画展についても、こうした関連展示を模索していきたいと思っています。（小林紀子）



みちのく丸の
「まざり」帆走の様子
2006年10月





春の恒例・子供向けの考古学入門展示、今年も『君も今日から考古学者！ 横浜発掘物語2017』として開催しました。今回の展示について、パネルに登場したキャラの皆さんに振り返っていただきます。



今回の企画展は、ゲームっぽい世界観で統一したんだ。企画展入口もダンジョンっぽい飾りつけにしてみたよ。ドット絵のレックルもかわいいと評判だったね（自画自賛）。担当者はドラクエのイメージだったけど、今の子ども達には「マイクラだ」と言われたよ。



「遺跡が埋まる？」は、理屈は知っているけれど誰も実際には見ることがない遺跡が埋まっていくようすを、展示室内で再現しようというコーナー。一人一個ずつ、色の付いたコーンクッション（梱包用の緩衝材）を入れてもらい、毎日積もっていく様子を観察したんだ。コーンクッションの色はおよ

そ一週間ごとに変更して、「土」の色の変化を再現したんだよ。



「一つずつ」という指示を守らないお客さんもいたけれど、三本目で終了したのは大体計算通りだったかしら。埋まる遺跡として、一本目には竪穴住居、二本目には大塚遺跡の空撮の写真を下に敷いていたんだけど、すぐに見えなくなっちゃったから、あまり意味がなかったわね（笑）



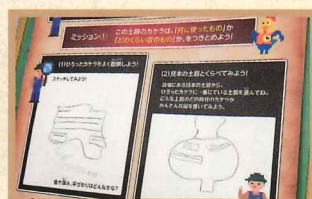
「ご近所の遺跡を探そう」は、横浜市の文化財地図を貼り合わせて色を付けたもの。お客さんには「おうちシール」や「学校シール」を渡して、自分の家や学校の場所に貼ってもらったんだ。



ご近所に意外と遺跡が多くて、興味を持った人も多かったみたい。図書室に文化財地図を見に来た人も、結構いたんだって。



展示を見ながら答えるワークシートを作ったんだ。これはただのおまけではなくて、特に表面の「土器のかけらをひろった！」編は、ワークシートを使って初めて展示が成立するようになっている。裏面の「いろんなナゾを解決！」編も、単に考古学の知識を問うのではなく「資料を見て答える」問題になるように工夫したんだよ。



子どもたちが、一生懸命に土器のかけらを観察してスケッチしている様子は、なかなか感動的だったよね。



こちらは、週末を中心に実施した発掘体験コーナー「遺跡を掘ろう！」です。発掘体験はずっと前からやりたかったのですが、展示室に土を入れる点などがネックで実現しませんでした。今回は、土のかわりにゴムチップを使い、復元土器のかけらや打製石斧、貝塚の貝などを埋めました。



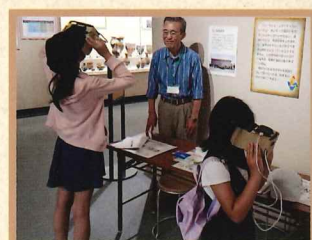
考古学専攻の学生さんに、「調査員」としてついてもらった。ただの宝探しにならないように、発掘のやり方や出てきたモノか



ら何がわかるか、などを説明する大事な役割よ。連休中は行列ができて大変だったけど、後半にはだいたい慣れてきていたようすだったわね。



もはや恒例となったVR体験、今年は、東は青森県三内丸山遺跡から西は大阪府池上曽根遺跡までの遺跡を訪問！



その二カ所だけだったけどね…でも「遺跡に行こう！」のコーナーでは縄文と弥生の代表的な二つの遺跡を体験してもらったんだよ。池上曽根遺跡の井戸の中など、普通は入れない場所にも行けてしまうのは、ヴァーチャルリアリティならではの体験だったよね。



今春の企画展から、特に「参加型」のコーナーを中心に振り返ってもらいました。キャラの皆さんもおつかれさまでした。あれ、確かもう一人誰かいたような…



おいおい、わしを忘れてもらっては困るぞ。わしがこの博物館のかんちょうだ。今回の展示について言っておきたいことがいくつかある。まず、担当の学芸員Xくんが、



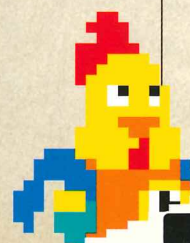
あ、かんちょう、今日は時間がないので、それは今度の会議の時にお願いします。それじゃあ皆さん、おつかれさまでしたー！

（一同）

おつかれさまでしたー！



キャラクターデザイン：やなぎ堂



かんちょう



レックル



学芸員X



大塚君



やよいちゃん



ジョー君



フィールドワークの様子 小祠を調査する会員

都筑区大塚の台から眺めた早瀬川

民俗に親しむ会

刈田 均

民俗に親しむ会
宇都宮博、長田文美、勝田富夫、
久世辰男、下村洋、下村信子、
林浩一、牧野秀樹、松本昇（50音順）

この春、民俗に親しむ会（以下「会」と略記）が二年間かけて行った鶴見川の支流の矢上川、早瀬川、大熊川流域のフィールドワークをまとめ、『横浜市歴史博物館調査研究報告』二二号を『民俗に親しむ会 鶴見川流域フィールドワーク調査報告Ⅱ』（以下『報告書Ⅱ』と略記）として刊行しました。

『報告書Ⅱ』は三章構成とし、第一章は調査報告で久世辰男さんによる『青面金剛の種子を持つ庚申塔について―横浜北部・川崎における庚申塔と青面金剛像の出現―』林浩一さんによる『溝口石工「内藤慶雲」について』、牧野秀樹さんによる『都筑区池辺町のコンクリート下地モルタル仕上げの狛犬について』というレポート三本を掲載しました。第二章は『鶴見川流域石工一覽表』です。平成二十七年（二〇一五）に刊行した『歩いた見た・調べた 横浜市歴史博物館民俗に親しむ会 鶴見川流域フィールドワーク調査報告』（以下『報告書Ⅰ』と略記）に掲載した『鶴見川周辺石工一覽表』について、フィールドワークの成果を加えて大幅に増補改訂したものです。第三章はフィールドワーク記録で、勝田富夫さんの発案で二年間の二一回に及ぶフィールドワークの行程を地図（マップ）として可視化したものです。会員の興味・関

心に基づくレポート、石造物研究の基礎データ、フィールドワークを追体験できる地図など、バラエティに富んだ内容となりました。

民俗に親しむ会は平成二二年（二〇〇九）から活動を始め、鶴見川をテーマにフィールドワークを実施してきました。平成二十七年（二〇一五）までの成果は前述の『報告書Ⅰ』としてまとめています。この経過などについては、博物館ニュース三七号・三八号で紹介しているので、ご参照ください（博物館HPで閲覧できます）。

これまで八年間続けてきた会の活動は今回の『報告書Ⅱ』を以って一区切りになるかと思えます。これまでの活動を会員の感想とともに振り返りたいと思います。

会の活動の中心はフィールドワークでした。実際に歩き、見て、興味や関心を深め、調べるという作業です。牧野秀樹さんによると「会の活動を通じて感じることは、何よりも「なぜ」と感じる瞬間が増えた」ことだそうです。十人十色の言葉通り、それぞれ興味や関心、また視点も異なっています。同じところを歩いているのに、何に注目するかは異なります。お互い影響しあって関心も広がったと思います。

久世辰男さんは「矢上川フィールドワークでた

またま青面金剛の種子（仏教の諸尊を梵字1字であらわしたもの）を初めて「発見」し感激しました。その感激を起点に、横浜北部・川崎の青面金剛の種子を持つすべての庚申塔を調べようと、夏の暑い日も冬の寒い日もミニバイクを駆って走り廻りました。また敬遠されがちな梵字（悉曇文字）の読み方にもチャレンジしてみました。とても楽しいスリリングな体験でした。」と記しました。『報告書Ⅰ』で「図師川島橋」を書かれた長田文美さんは「橋の建て替えの記録を探そうと、東京都や町田市役所に電話で何度も問い合わせ、偶然にも「工事を担当した者が丁度今いますよ」と対応して下さったときの興奮とうれしさは忘れられません。もう1回前の電話で諦めていたら、報告書は書けませんでした。」と報告しました。調べて結果をまとめる作業は大変ですが、達成感は大いことがわかります。

一方で林浩一さんは「原稿の締め切り間際に書き直しになり、もう駄目だと思いましたが民俗に親しむ会の方々に沢山のご助言をいただき、なんとか完成することができました。」と記しています。牧野さんも「皆が各々何を追いかけているかを知っているため、「〇〇があったよ」「この本には〇〇との記載があったよ」等御教示頂く事が多々あった」と述べています。八年間の活動は会員相互が情報と経験を共有し、影響しあう「仲間」に成長させたようです。

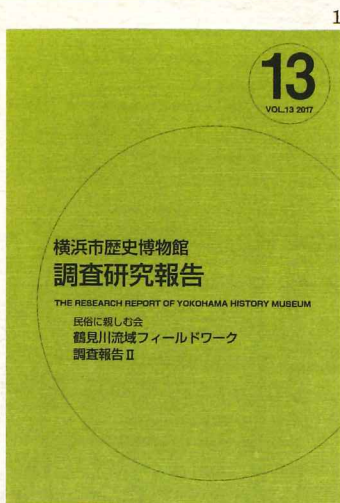
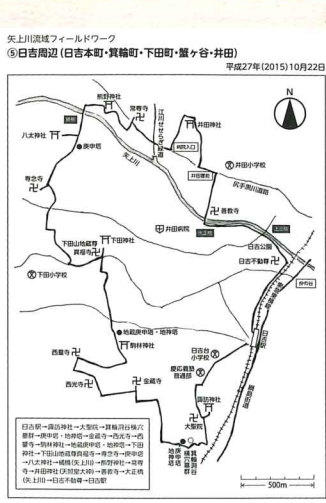
勝田富夫さんはフィールドワークで「道すがら目にした季節の移りや、高台から眺めた流域の地形と街の様子風景」を楽しんだそうです。

勝田さんはこの楽しみを記録し、会員はもちろん会員以外の誰でも共有できるように、『報告書Ⅱ』で行程を可視化する地図（マップ）の掲載を発案し、牧野さんとともに作図しました。校正作業に携わった下村信子さんは「マップを校正する際は、メンバーのフィールドワークメモや記憶を掘り起こす作業となりました。「体力、気力」プラス「記録」がフィールドワークに大切だと痛感しました。」と振り返っています。掲載に至るまでの作業は大変でしたが、この二年間「諸事情で余り参加出来なかったことは非常に残念でした」と綴っている宇都宮博さんは、この地図を「私以外にもいろいろな方に役立つものを与えていただきた」と評価し、目的が達せられていることがわかります。地図（マップ）は会のアーカイブ以外にも活用できる成果になりました。

会は当館の調査研究活動の一環である市民協働民俗調査という位置づけで始まりました。そして八年間の活動とその間まとめた二冊の報告書によって、会のメンバーは立派なフィールドワーカーに成長しました。博物館としてもこの間真っ当に市民と協働した調査を進められたと思います。

会は、今年度からメンバーを加え、新たなかたちで活動を始めます。どのような会になるかはわかりませんが、今後も見守っていただけたら幸いです。

刊行物はミュージアムショップにて販売中です



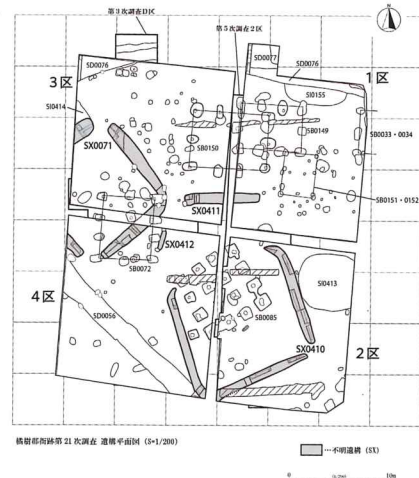
1『横浜市歴史博物館調査研究報告』13号表紙 2 フィールドワークのルートと主な探訪地が記載された地図(マップ) 3〜5 これまでの民俗に親しむ会の成果刊行物 「報告書Ⅰ」、展示図録『鶴見川流域のくらし-生業・水運・信仰-』、流域の狛犬を集めた写真集『鶴見川流域の狛犬百態』

「諸岡五十戸」木簡に迫る

文 鈴木靖民

前号で、横浜市の東部が含まれる古代の武蔵国橘樹郡の中心地、郡家跡について述べました。川崎市教育委員会の発掘調査によって、七世紀半ばから末頃の評(郡)の前身)の時の東西南北、または東西南の三方が長い溝状に掘られ、掘立柱でない状態の建物跡が何棟か検出されました。この遺構は韓国の古代百濟地域や奈良県の飛鳥、滋賀県の穴太その他の渡来人の居住地の壁を持った構造と共通しており、これも大壁建物ではとの説が出されました。しかし四隅に柱や壁跡がない点などの理由で、「特殊建物」とか「不明遺構」と呼ぶことになったようです。私のコラムでも断定は控えましたが、イラストレーターが切妻造りの建物を描いてしまいました。その後、私は大壁建物を研究する青柳泰介さんに論文を頂き、四隅が壁になっていない例も大阪の大

園遺跡をはじめとして各地に結構あることを知りました。ある一辺が壁や塀を持たない箇所は地面に柴、樹皮、板、藁、茅などを編んで垣根状に建てたと想像されます。アイヌの平地式住居や鎌倉時代の村の葦、草、板、網代の壁で柱穴を残さない構造の建物の例があります(遺跡に読む中世史)。隅が空く箇所は可動式の出入口や物置だったでしょう。大壁建物の類は、関東では一〇遺跡以上を数え、神奈川県内にも八世紀頃の官衙遺跡や集落の住居跡にあり、栃木県の官衙跡の西下谷田遺跡や薬師寺に接する落内遺跡も注目されます。これらは仮設建物かもしれないませんが、渡来文化の影響が考えられます。調査担当の栗田一生さんも、橘樹評家の造営時における飛鳥部吉志氏のような渡来人との関係を示唆しておられます(『日本歴史』八二五)。最近の成果を



橘樹郡衙跡(千年伊勢山台遺跡)第21次調査遺構平面図
(川崎市教育委員会提供)

これが「諸岡五十戸」
木簡(復元)です。



ところで、二〇〇六年、博物館では奈良県明日香村の石神遺跡出土の「諸

罡(岡)五十戸」と記された貢納物の付札木簡の企画展を催しました。諸岡五十戸は七世紀後半の无射志国久良岐評諸岡里の前身で、港北区師岡付近に当たります。同地には市の指定無形民俗文化財の筒粥神事や、またサッカー神社で有名な師岡熊野神社が鎮座します。一一・六セ



「諸岡五十戸」木簡
(複製) 当館蔵
私は監修
する『古
代文学と

皮□』と墨書されますが、八字目が三つに割れており明瞭ではありません。私はこの字を上がアミガシラ(四)であり、下は左に墨痕があり、右をフルトリ(佳)のくずしとみて羅と考えました。が断定できませんでした(「相模の古代史」)。その後、私は長屋王家木簡の「新羅人」云々の表記に似かよっ



長屋王家木簡(部分)
平城宮発掘調査出土木簡概報23-11

た字を確認しました。田皮羅はタハと羅に分解でき織物の種類を表すかもしれないませんが、タ

ハラ(タワラ)なら産物を容れる俵のことになります。各地の「五十戸」木簡には俵の例があります。当時は地名と五十戸だけある例、また五十戸調、五十戸人とあるだけの例も多く、後のように年次、産物名、数量、貢納者の所属や人の名を細かく記す形式ではありませ

隣接諸学』シリーズの『古代の文字文化』の巻をみていて、俵が倭製の国字であることに改めて気づかされました。古代の漢字に詳しい方国花さんによると、俵の読みはヒヨウで、字義は散る、分け与えるですが、国訓ではタハラです。俵字木簡の出土遺跡は時代順に奈良県石神、飛鳥京跡苑池、飛鳥池、藤原宮・京、滋賀県西河原森ノ内、福岡県井上薬師堂、奈良県平城宮・京、西隆寺、滋賀県宮町で、七世紀後半が多くを占め、八世紀に及びます。小谷博泰さんは、飛鳥から奈良時代へと推移するに従って魚の「多比」から「鯛」へのように、一字ずつの表音から訓字へと表記が変わっていく傾向があると



師岡熊野神社は筒粥神事で有名

しましたが(「木簡と宣命の国語学的研究」)、方さんは国字も同じとされます。すると、八字目を羅と読んでよければ当時の日本各地では田皮羅から俵への表記の変化があったと考えられ、田皮羅とも書いたという仮説もなお許されると思います。地方で木簡などの書記を担うのは官人かその下役です。文字を知る渡来人もいたでしょう。田皮羅だけでは中身が分からなくても、飛鳥の京に運ばれた現物で判断すればよかったのでしょう。貢納者の名を記さないのは、まだ個々人でなく五十戸全体の供出物という性格だったからでしょう。諸岡の地で納めた産物を後の例から推すと、織物、染料になるベニバナ、アカネ、加工した魚、海藻などが想定できます。



「小さな縄文土器」 横浜市・きむらさん一家 2017年2月19日参加

縄文土器が出土した遺跡で縄文土器が作れる!ということで、家族4人で参加しました。学芸員の方々の丁寧な説明にはじまり、子供たちはすぐに粘土ひもつくりで熱中。当日朝、教室到着までずっとやりたくないと言っていた次男も、いつのまにか普段見せないような真剣なまなざしで粘土と格闘していました。

土器全体を均一にちょうど良い厚みにするのが難しかったけど、親切なアドバイスのおかげで無事に土器の形になりました。縄目の模様だけでなく、長男は口に炎をイメージした装飾を、次男はワンパットの模様(縄文と関係ない...?)を追加して出来上がりました。後日行われた野焼きにも参加しました。思った以上に炎は大きく、離れていても熱くて土器が丸焦げになるのでは!と心配になりましたが、無事に土器を手にしたとき、5000年前にもこの場所でこんな風に乗っていたのかな、と感慨深い気持ちになりました。帰宅後、別の粘土で土偶を作ったり、我が家では縄文土器ブームが到来しています。



「れきし工房」
参加しました

博物館の未来をつくる

博物館の事業に寄附を通じてご参加ください

公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団が管理運営する横浜市歴史博物館では、下記の事業につきまして多くの皆様からの寄附を受け付けております。いずれの事業も、学芸員のアイデアを大きく育て、その成果をひろく市民のみなさまに還元していくことを目的とした特別なプロジェクトです。

これらのプロジェクトを通じて多くの方々に横浜の歴史や文化を伝え、「ふるさととしての横浜」を大事にする気持ちを育んでいくためにも、皆さまからのご寄附を心よりお願いいたします。



「博物館デビュー支援事業」

「ふるさととしての横浜」を大事にする気持ちを育んでいくために、横浜市内の小学校等に学校内歴史資料室に伝わる地域の文化財の整理、展示のリニューアルをすすめてまいります。

「よみがえれ! ヨコハマのハニワたち」

上矢部町富士山古墳出土埴輪の未整理分の破片の整理・復元作業をおこない、報告書を刊行するとともに、展示を通じてその成果を広く市民・県民の皆様にご覧いただく事業の一層の充実をはかってまいります。

募集に関する詳しい内容は博物館ホームページをご覧ください。(HPトップ>メニュー「参加する」>寄付する)

◎表紙写真について

ぬのびきのたきあぐんたよしひらのれいなんばじろうをうつ

〈作品名〉月岡芳年「新形三十六怪撰 布引滝源太義平霊討難波次郎」(神奈川県立歴史博物館所蔵)

源太の異名を持つ源義平(頼朝・義経の兄)。平治の乱で敗れ、平清盛の腹心難波次郎に斬首されたが、その怨霊は雷神と化し、布引滝で難波を討った。

横浜歴博 第1回「myキャラ」募集

横浜市歴史博物館の常設展示室内の各ブースオリジナルmyキャラクターを募集します!

マスコットキャラクター「レックル」と一緒に、これからの博物館を応援してくれる「myキャラ」をみんなでいろいろつくってみませんか?ご応募いただいた作品は、人気投票をおこない上位10キャラクターをなんと本格デザイン化し、博物館で活躍してもらう予定です!

START

博物館
に行く



受付で
「myキャラ作りのために
来館しました」と伝える

※1グループ全員、団体割引料金になります。



常設展示室を
よく見る。

※ブースが6つあるよ。



「これだ!」
「これよ、これ!」
と思う自分のお気に入り
展示物をチョイス。
キャラクター図案を考える。

※複数の展示物をあわせたキャラでもOK。
※ひとつのブースをえらんでね。



2F常設展示室にある
応募用紙に描く



myキャラクターの
「なまえ」や「とくちょう」も大切。
ぜひ書いてね。



応募する



後日郵送、持参
FAXでもOK

GOAL!

応募資格

どなたでも。(横浜市歴史博物館来館が必要です)
お一人様何点でも応募できます。
自身のオリジナル未発表作品に限りです。
(※人がつくったものをまねると、著作権の侵害になってしまいます。)

★必要条件を記入した応募用紙を、郵送、FAX、持参してください。
※郵送等にかかる費用はご負担いただきます。

myキャラ募集期間

2017年7月19日(水)~11月30日(木)

myキャラ人気投票期間

2017年12月16日(土)~2018年1月28日(日)

★応募作品は返却いたしません。
★人気投票の際は、応募作品と応募者名を公表します。
作品は横浜市歴史博物館ホームページでもご覧いただけるようにします。
いただいた個人情報は、その他の目的には使用いたしません。
★応募作品に関わる権利は横浜市歴史博物館に帰属するものとします。

[郵 送 先] 〒224-0003 横浜市都筑区中川中央1-18-1 横浜市歴史博物館 myキャラ係
[FAX番号] 045-912-7781 ※誤送信にご注意ください